マゴコロノマナビ
第119回 真心乃学

「保育」の原点 119

神経質な赤ちゃん（1）

文 葛西得男
text by Tokuo Kassai

内藤寿七郎著
『育児の原理』

〝子供は、親の心を映し出す鏡である〟とよくいわれます。

ある若いお母さんが、母乳で育ってきた五か月の赤ちゃんが、離乳食を始めてから四日間ぐらい便秘をする、と相談にみえたことがあります。見たところ、赤ちゃんはいたって元気で、機嫌もよいのです。調べてみると、意外なところに原因がありました。離乳食を食べさせてみたが、だいじょうぶかなぁ、というお母さんの不安が、赤ちゃんに肌を通してのり移り、赤ちゃんの腸の自律神経のバランスが壊れたための便秘、こんどは、その便秘がまた母の不安となり、悪循環をしていたのでしょう。

「便秘のレコードで、外国では十日以上のものもありますよ」と話をしたら、帰宅後すぐ便通がありました。つまり、赤ちゃんの便秘は、お母さんの不安によるストレスにあったのです。便秘を心配する母親の気持ちが赤ちゃんに伝わって、赤ちゃんが神経質になり、さらに便秘が続く、という悪循環なわけです。こんなときは、赤ちゃんの便がいつ出るかと、気をはりつめたりせず、いま出るか、もう出るかと、赤ちゃんの顔を見るのではなく、そんなことは忘れて、楽しく笑みをかわして赤ちゃんを大らかに扱うことが大切です。

のんびりしているお母さんの赤ちゃんは、やはりのんびりしていて、神経質なお母さんの赤ちゃんは、やはり神経質であることのほうが多いようです。

そして、神経質なお母さんにかぎって「先生、うちの子はどうも神経質で困ります。どうにかならないものでしょうか」と心配そうに訴えるのです。これは、赤ちゃんが神経質というよりも、残念ながらお母さんのほうが神経質だといわなければなりません。

たいていの場合、赤ちゃんは、お母さんが心配するほど神経質ではありません。しかし、なかには、たしかに神経質な赤ちゃんもいます。そうした赤ちゃんには、それなりの対応の仕方をしなければなりません。

『育児の原理』より

Profile

1950年12月8日大阪に生まれる。
1972年、追手門学院大学卒業後、米国ボストンカレッジに留学。
1975年に帰国後、アップリカ葛西に入社。営業部、副社長、社長を経て、1996年に社会福祉法人 松稲会 理事長に就任。
松稲会は社会福祉法人として高齢者介護施設「アップリケア」と認可保育園マザーシップ保育園を運営している。
アップリカ葛西 副社長時代に国連環境計画（UNEP）のスペシャルアドバイザーとして子供たちのために地球環境問題を考えるプロジェクトに参画し、世界の賛同者と世界会議、イベント普及活動などを行いながらその人脈などを広げ現在に至る。